

# 夜明け前

映画文学人生論

原作：島崎藤村 (1929-35年)  
監督：吉村公三郎 (1953年)  
出演：青山半蔵 滝沢修  
お民 小夜福子  
お糸 乙羽信子  
兼吉 宇野重吉

「中央公論」

脚色：新藤兼人  
撮影：宮島義勇  
音楽：伊福部昭

木曾路はすべて山の中である

昭和四年 (1929)、蒸気河岸の先生が青べか村で売れそうもない原稿を書いていた頃、島崎藤村は「中央公論」に『夜明け前』の連載をはじめた。若くして詩人としての名声を得た藤村は明治三十九年、小説『破戒』で当時の文学的主潮流、自然主義の代表的作家としての地位を確立し、文壇の大家になっている。

私は中学生の頃、藤村の詩を愛読した。小説も『破戒』を読んだことがあるが、『夜明け前』は未読のまま。木曾路とも縁がなかったが、銀座の近代美術館フィルムセンターで吉村公三郎監督の映画を観る機会に恵まれた。

映画で大筋をつかんで、その勢いをかりて長編の原作を読むというのは邪道かもしれないが、私の場合、『夜明け前』を読了できたのは、映画のおかげともいえる。

主人公の青山半蔵 (滝沢修) は、「あの黒船が浦賀沖に来て以来、日本人はずっと不幸せなんだぞ」という寅さんのセリフ (『寅次郎春の夢』) を連想させられる人物である。

半蔵のモデルは藤村の父親の島崎正樹だ。馬籠の本陣・庄屋・問屋を譲り受けた半蔵は、平田派の国学者、歌人として尊敬を集める身でありながら、晩年に菩提寺の放火未遂事件を起こし、座敷牢に入れられて、狂死した。

寅さんがいう不幸せな日本人は唐人お吉や蝶々



## 夜明け前

映画文学人生論

夫人のような女性だが、男も不幸になっている。そう思いながら読みすすめているうちに、いつのまにか私は半蔵に同情していた。理想家肌で、心のやさしい人柄は、「いやしきもたかきもなべて夢の代をうら安くこそ過ぐべかりけれ」という歌でおしはかることができる。土農工商の身分差別のあった封建的な江戸時代への批判と維新による日本の夜明けへの期待がうかがえる。

しかし、維新後の半蔵は天皇の御馬車の中に扇子を投げ込んだり、菩提寺に火をつけるような過激な行動にはしる。おだやかな性格の半蔵がなぜ献扇事件や放火事件を起こしたのか。

それは平田派の国学の思想とかわりがある。尊皇攘夷をとなえて徳川幕府を倒し、王政復古をなしとげたのは薩長を中心とする下級武士たちだが、本居宣長や平田篤胤の流れをくむ国学者たちの思想的エネルギーも無視できない。彼らは儒教や仏教のような外来の思想を否定し、古代の神ながらの道を理想とした。「一切は神の心であるうでござる」と、半蔵は王政復古の世を悦んだ。

しかし、維新後の政府は攘夷から一転して欧化政策をとりはじめた。夜明けは文明開化、脱亜入欧の方向に進んで行く。半蔵が菩提寺に放火したのは明治十九年。「廃仏毀釈」の残り火のような行動で、時勢に大きく遅れていた。

夜明け前木曾路はすべて山の中